

## 「朝鮮民俗学」と植民地主義 「遠距離砲」としての「比較民俗学」

“Korean Folklore Studies” and Japanese Colonialism:  
“Comparative Folklore Studies” as “Long-Range Missiles”

南 根祐

### ①はじめに

- ② 「柳田民俗学と朝鮮」
- ③ 「比較民俗学の問題」と日鮮同祖論
- ④ 「比較民俗学」の政治性

### 【論文要旨】

日本帝国の植民地・朝鮮に成立、展開した「朝鮮民俗学」について、内省の学としての一国民俗学を志向した柳田國男がどういう態度や距離をとっていたか。従来、日本における「朝鮮民俗学」論では、主にこの問題に議論の焦点が絞られ、その結果、次の3点が通説と化しつつある。柳田は、①「朝鮮民俗学」の確立を期待し、孫晋泰や宋錫夏などの朝鮮出身の学者にたいして研究の支援もした。しかし、②朝鮮総督府とその御用学者たちによる朝鮮民俗の調査、研究にたいしては強い警戒心を持っていた。ただ、③一国民俗学の立場から、「日鮮」の民俗の比較には慎重または消極的であった。

そこで、本稿では、まず、一国民俗学の相対化の問題とも関わる①と②の当否を検討してみたところ、両者ともに成り立ちにくいことが明らかになった。特に、後者の朝鮮総督府や台湾総督府などの、植民地の統治資料の収集を目的とした収奪的な「民俗調査」にたいして、柳田は強い警戒心を示すどころか、逆にそれを「永く後代に遺るやうな立派な仕事」として高く評価していることがわかった。

次に、③の問題を戦時下における柳田の一連の比較民俗学的な言説のなかで照射してみた。具体的には、東アジアにおける「記傳以外の文化交流」の存在を前提に、昔話の比較研究の必要性を唱えた1940年前後の言説群やその延長線上で打ち出される「大東亜圏民俗学」の構想などを取上げ、柳田民俗学の植民地主義との関わりを論じた。と同時に、戦時下の生死觀をめぐる柳田の言説を拾い上げ、その「世用実益」のための「殉国」のイデオロギーの創出が、いかに日本民俗学およびそれを頂点とする「大東亜圏民俗学」の実践的課題と化していくのかを論じた。